

草むらに入るなら 長袖・長ズボンを

「マダニの科学」の著者の一人で、帯広畜産大准教授の白藤梨可さんによると、マダニ類は日本全国にいて、イノシシやシカ、野ネズミといった野生動物が出没する草むら、やぶなどに多く生息する。家畜の放牧地にもいる。

そうした場所に立ち入る際には長袖・長ズボンの着用を徹底し＝イラスト、上着を着ていたら適宜、手で表面を払い落としてマダニを肌寄せ付けないようにする。忌避剤も有効だ。犬や猫も草むらなどで血を吸われる可能性があり、マダニが付いていないかを確認するといったいう。

マダニから
身を守る
服装

首には
タオルを
巻く

袖口・裾も
手袋・靴下を
かぶせ、
肌の露出を
減らす

国立健康危機管理研究
機構のホームページの
情報を基に作成



命に関わるウイルス感染症を媒介するマダニ。刺された後、牛肉や豚肉などの獣肉を食べると、じんましんなどが出るアレルギー疾患「 α -gal（アルファガル）症候群」の発症例

「以前勤めていた関東の病院に比べ、患者が目立って多い」。豊田地域医療センター（愛知県豊田市）でアレルギーセンター長を務める中村陽一さんはこう話す。

牛豚肉でじんましん

が報告されている。医師や専門家は、夏の行楽や農作業で草むらに立ち入る際には、長袖、長ズボンなどで肌の露出を極力減らし、マダニから身を守るよう呼びかける。（佐橋大）

体長約3ミリのヤマトマダニ

（白藤梨可准教授提供）



マダニ で肉アレルギーに

ウイルス感染症だけじゃない！

海に近かった前任地では、同症候群の患者はほぼいなかった。昨年、周囲に山林も多い同センターに来てからは、疑い例を含め1年で約10人の患者を診た。その1人、4年前から牛豚肉を食べた際にじんましんが出るという女性は、自宅近くにマダニがいて、症状が出始める前に刺されたことがあった。

アナフィラキシーも

アルファガルは、糖が鎖状に連なった物質「糖鎖」の一種。マダニの唾液や、多くの哺乳類の肉に含まれる。マダニが人の血を吸うために皮膚に付いて刺すとき、唾液内のアルファガルが血液中へ。一部の人にはアルファガルに対する抗体

が作られ、「臨戦態勢」が整う。その状態で獣肉を食べると、肉に含まれるアルファガルに免疫が過剰に反応し、アレルギー症状が起きる。魚のカレイの卵にも、アルファガルによく似た物質が含まれ、同様の症状が出る。多くは、食べて数時間後に現れるじんましん。重いアレルギー反応「アナフィラキシーショック」に陥る人もいる。

診察では症状が出た人に、獣肉の摂取を避けることや、草むらに入る際には、マダニに刺されないよう、肌を出さない服装にするよう指導する。症状が出てその後、マダニに刺されることがなければ、時間の経過とともに症状が出にくくなるという。ただ、診断できる医療機関には限りがあるので注意したい。

一方、アレルギーとは別に、マダニが媒介する感染症は、致死率が10～30%の重症熱性血小板減少症候群（SFTS）や、頭痛や発熱を伴う日本紅斑熱などがある。国立健康危機管理研究機構（東京）によると、今年のSFTS感染者は7月20日までに全国で112人。豊田市では6月、SFTSで2人が亡くなった。「マダニを介するウイルス感染のみならず、アレルギーを防ぐためにも、対策を怠りなく」と中村さんは注意を呼びかける。